

ひょうたん島通信

大槌発! 第27回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、^{ひょうたん島}蓬萊島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



震災後初の一般公開! 大盛況でした!

河村 知彦 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター センター長・教授

大槌湾で獲れたアカウミガメに目が釘付けの子供達。

去る7月18日(土)、震災後はじめて沿岸センターの一般公開を行いました。震災前の2010年以前にも毎年“海の日”の前後に実施していましたが、当時は千数百人の来場者がありました。人口1万5千人ほどの町で千人以上の来場者ですから、まさに町の一大イベントだったと思います。沿岸センターの研究活動や共同利用の受け入れは2011年5月には再開し、地震と津波による沿岸生態系への影響とその後の変化に関する研究を中心とした研究活動を精力的に行ってきましたが、一般公開は休止してきました。その余裕がなかったこともあります。かろうじて残った研究棟の3階部分だけを補修して使っている状態の沿岸センターは、とても皆さんにお見せできるものではないと思っていました。しかし、最近いろいろな方から一般公開の再開を望む声をいただくようになりました。一見廃墟のようにも見える被災した研究棟で、我々が懸命に仕事をしていることを地元の皆さんに知ってもらえるのも良いかと考え、新しく建てたプレハブ倉庫と実験棟、それに補修した研究棟の3階の一部を使って、一般公開を開催することにしました。

子供達が海で遊ぶことや海の生き物に触れる機会は、海辺の町である大槌町でさえも最近はめっきり少なくなっているということを開き、子供達に海の生き物に触れてもらい、海の楽しさや不思議を感じてもらいたいという思いで、「生き物タッチプール」、「ちりめんウオッチ

(“ちりめんじゃこ”の中から他の生き物を探す)、「星砂ひろい(砂の中から“星砂”を拾う)」、「大槌生き物博物館(海洋生物の標本展示)」、「魚の体力測定(魚が流れに逆らって泳ぐ速度を測る実験装置の実演)」、「ウミガメにさわ

ってみよう」という小学生から中学生向けのイベントを用意しました。さらに「海の勉強広場(パネル展示)」、「観測機器の展示・説明」と2題の講演(「魚の来た道を辿る 一ウナギの進化」、「三陸の海は今どうなっているのか?」)を実施して、沿岸センターの研究活動についても知っていただこうと考えました。

大槌町役場に全面的にご協力いただき、町の広報誌にチラシを入れて広くお知らせいただくとともに、教育委員会のご尽力で子供向けのイベントを小学校の授業の一環として位置づけていただき、前日の17日(金)に大槌学園と吉里吉里学園の小学3、4年生があわせて100人近く来てくれることになりました。聞いていたとおり、多くの子供達が海の生き物にほとんど初めて触れたようで、おっかなびっくりの子供も多く見られましたが、みんな目を輝かせて各イベントを楽しん



でくれました。なかには、翌日の一般公開にも家族を連れて来てくれた子もいました。18日の一般公開には、9時の開場とともに多くの家族連れが来られ、3時の終了まで人が絶えることがありませんでした。震災前の千数百人には及びませんが、200人を超える来場者がありました。柏から応援に来ていただいた事務部の方々に加え、沿岸センターに所属する職員、学生を総動員して対応しましたが、休む間もないほどの大盛況でした。研究棟3階の実験室に椅子を並べて実施した講演会にも立ち見が出るほどの人が入り、震災後の私たちの研究活動の一端を知ってもらえることもできました。これを機会に、海の生き物や環境に興味を持ってくれる子供が一人でも増えてくれれば嬉しいですし、被災地で行われている重要な研究について、さらに多くの地元の皆さんに知っていただければと思います。今後もこのような機会を増やして、地域の皆様に愛される、誇りに思っていたらる研究所の再建、発展を目指したいと思います。



(左)「ちりめんウオッチ」にみんな真剣! (右) 実験室での青山教授の講演に聞き入る来場者。

制作: 大気海洋研究所広報室 (内線: 66430)